

1. 国家目標の実現と確立
 1. 日本の歴史と文化の正しい継承
 1. 21世紀を拓く人間教育への転換
 1. 国際的視野からの正論報道
 1. 地域共同体(コミュニティ)精神の再確認

時事評論 石川

発行所
 北潮社
 〒920-0962 金沢市広坂1-2-23
 ☎(076)264-1119 FAX(076)231-7009
 定価 1部 200円・年 2,000円
 郵便振替口座 13160 17620841
 北国銀行金沢市役所普235247

政治的洞察に缺ける政治評論 「屋山氏よ、評論家の資格はないぞ」

早稲田大学准教授 岡田 俊之輔

この秋期、早稲田大学文学部に於ける講義「政治と文学」にてジョージ・オーウェルの評論を講義してゐる。「動物農場」「一九八四年」といった政治小説で知られるこの二十世紀英国の作家は、例へばかういふ事を説いた。「選挙とは總て、政治的な選挙でさへも、善か悪かを選ばずだ」と大方の人間は今なほ信じ込んでゐるが、そんな幼稚な考へは捨てねばならぬ。「政治の場」で出来る事は精々、二つの悪の内いづれが増しかを減らす事、その程度でしかあり得ない。」

法律や裁判は無用の長物なのか
 かういふ人間や政治に關する深い洞察を昨今のジャーナリズムに見出す事は頗る稀で、政治評論の大半はその時々現象に振り廻されてゐるに過ぎぬから、日頃目を通す事は殆ど無い。ところが先日、ついでに表題に釣られて、とある論評を讀んだ。「産経新聞」十月三日附「正論」欄、屋山太郎氏の一文である。題して「小澤氏よ、議員の資格はないぞ」。或は編輯者が附けたタイトルなのかも知れないが、「讀」したところ、本文の内容に沿つてゐる事は判つたものの、肝腎の本文自体は、果せるかな、ほぼ全篇に亘つて異議を唱へたくなるやうな、正に「謬論」であつた。書き出しはかうである。

「政治資金規正法違反で秘書3人が有罪判決を受けたといふのに、親分の小澤一郎元民主黨代表が議員職をもしない厚顔は驚く。」

小澤氏本人に有罪判決が下つた譯ではないのだから、何ら驚くには當らない。しかも「自分」たちは控訴して無罪を訴へてゐる。さうである以上、吾々法治国の國民は彼等の法的権利を尊重せねばならぬ。今般、産経本紙は九月二十七日附社説「主張」欄で、「小澤氏は深く政治的、道義的責任を取り、今すぐ議員職を辞すべきである」と厳切型の批判を行つてをり、「法の下の平等」を否定する屋山氏の以下の妄言も實質上これと同断だ。

「推定無罪といふのは、下の話であり、政治指導者は神が不可欠だ。疑はしきは罰せず」ではなく、「疑ひをかけられたら返く」の「推定無罪」の道である。」「推定無罪」は「下々」の者にのみ適用されるとは初耳だが、抑も法的に有罪は、「疑はしきは罰せず」

「政治資金に詳しい」岩井奉信・日大教授の談話が載つてゐる。曰く、「これまで々と主張」するのは、言論・言論機関にとつて言語道断の自殺行為に他ならぬ。故小室直樹氏が強調したやうに、「裁判が始めれば、學者評論家は發言を控へ、マスコミもごく簡単な経緯しか報道しなくなると、それが「豫断は裁判の禁忌である」と承知してゐる眞つ當な「デモクラシ」諸國の常」なのだ。「道義的責任をとりやうの追及は、最高裁が有罪判決を下してからにすれば宜しい。」

根據薄弱な素人禮讃思考
 それにしても、元秘書たちが揃つて上告したくなつたのは尤もである。判決の要旨には「優」これを推認することができ「るのだ。」「強」推認される」だといふ表現が目につくけれど、かうした「推認」の在り方は甚だ危ふい。これと「政治指導者」ならぬ「下々」の者として、いつ何時、犯罪者にされるか解つたものではない。「推定無罪」といふのは、下々が疑ひをかけたときの話であり、云々と呑氣な事を言つてゐる場合ではないのである。九月二十七日附「讀賣新聞」朝刊の社会面には、「政治資金に詳しい」岩井奉信・日大教授の談話が載つてゐる。曰く、「これまで々と主張」するのは、言論・言論機関にとつて言語道断の自殺行為に他ならぬ。故小室直樹氏が強調したやうに、「裁判が始めれば、學者評論家は發言を控へ、マスコミもごく簡単な経緯しか報道しなくなると、それが「豫断は裁判の禁忌である」と承知してゐる眞つ當な「デモクラシ」諸國の常」なのだ。「道義的責任をとりやうの追及は、最高裁が有罪判決を下してからにすれば宜しい。」

清潔か否かは二の次、三の次
 屋山氏は、「李下に冠を正さず」といふ諺を引いてゐる事からも解るとおり、政治家に先づ清潔潔白を求めをり、小澤氏を、金と権力によつて「より大きな権力を握」んだ故田中角栄元首相と「瓜二つ」だと評し、一方、故岸信介氏以降の歴代首相について、田中氏以外「皆、質素な家に住み、生活態度も立派だつた」と言ふ。ここで借問する。貴論で稱揚される元首相の諸氏は一切手を汚さずに「首相の座を射止めた」か。よもや屋山氏とて、さうは認めまい。百と零なら、それは眞の違ひだと、百と五十なら、いや百と二でさへも、所詮は程度の差に過ぎぬ。要するに政治家の評価は、その掲げる政策と、悪しき手段すら厭はずに爲し遂げた実績とによつて行ふべきであつた。清潔であるか否かは二の次、三の次でしかない。例へば「文武両道をたしなむ」といふ精神と賢潔を恥ぢる心を持つてゐた「故福田赳夫氏は昭和五十二年、日航ハイジャック事件の人間を救ふべく、「人命は地球より重い」として身代金を拂ひ、囚人を引き渡すといふ「超法規的措置」を取つたが、結局のところ、身銭ならぬ

この度、屋山氏の昨今の論調を調べてつづつた。どうやら「官僚主導」を排して「政治主導」にすれば萬事うまくゆくとも考へてゐるらしく、その思ひ込みを巡つて、小澤一郎といふ政治家に対する論評もこのころと變つたのだ。かの年金登録漏れ問題では自治労と懸けて「小澤じぢらう」で揶揄したかと思へば、いざ郵揀したかと思へば、いざ民主黨が政権を取りさうだとすると、「官僚内閣制」の脱却といふ目標に向つて小澤氏はこの二十年間、一直線に歩いてきた」と褒め上げる(「諸君!」平成二十年十二月號)。そして政権交代が實現した際には、「日本沈没といふ國民の危機感が不安に満ちた民主黨にでも政権を託してみよう」と判断させたのだから、さうした「大衆は賢明だつたといふべきだ」とまで書いた(「WILL」平成二十一年十二月號)。

さういふ手合を「馬鹿者」と呼ぶ
 ところが民主黨政権の「脱官僚主導」が進めぬ現状に苛立つや、党内實力者の小澤氏を今回のやうに扱き下ろす。これだけ見識の無さを晒す「物證」が揃つてゐる以上、「屋山氏よ、評論家の資格はないぞ」と言はれても返す言葉はあるまい。八月十六日附「正論」欄に見える御自身の「小澤」批判の言を藉れば、「恥」を知つて貰ひたい。」

この度、屋山氏の昨今の論調を調べてつづつた。どうやら「官僚主導」を排して「政治主導」にすれば萬事うまくゆくとも考へてゐるらしく、その思ひ込みを巡つて、小澤一郎といふ政治家に対する論評もこのころと變つたのだ。かの年金登録漏れ問題では自治労と懸けて「小澤じぢらう」で揶揄したかと思へば、いざ郵揀したかと思へば、いざ民主黨が政権を取りさうだとすると、「官僚内閣制」の脱却といふ目標に向つて小澤氏はこの二十年間、一直線に歩いてきた」と褒め上げる(「諸君!」平成二十年十二月號)。そして政権交代が實現した際には、「日本沈没といふ國民の危機感が不安に満ちた民主黨にでも政権を託してみよう」と判断させたのだから、さうした「大衆は賢明だつたといふべきだ」とまで書いた(「WILL」平成二十一年十二月號)。

この度、屋山氏の昨今の論調を調べてつづつた。どうやら「官僚主導」を排して「政治主導」にすれば萬事うまくゆくとも考へてゐるらしく、その思ひ込みを巡つて、小澤一郎といふ政治家に対する論評もこのころと變つたのだ。かの年金登録漏れ問題では自治労と懸けて「小澤じぢらう」で揶揄したかと思へば、いざ郵揀したかと思へば、いざ民主黨が政権を取りさうだとすると、「官僚内閣制」の脱却といふ目標に向つて小澤氏はこの二十年間、一直線に歩いてきた」と褒め上げる(「諸君!」平成二十年十二月號)。そして政権交代が實現した際には、「日本沈没といふ國民の危機感が不安に満ちた民主黨にでも政権を託してみよう」と判断させたのだから、さうした「大衆は賢明だつたといふべきだ」とまで書いた(「WILL」平成二十一年十二月號)。

この度、屋山氏の昨今の論調を調べてつづつた。どうやら「官僚主導」を排して「政治主導」にすれば萬事うまくゆくとも考へてゐるらしく、その思ひ込みを巡つて、小澤一郎といふ政治家に対する論評もこのころと變つたのだ。かの年金登録漏れ問題では自治労と懸けて「小澤じぢらう」で揶揄したかと思へば、いざ郵揀したかと思へば、いざ民主黨が政権を取りさうだとすると、「官僚内閣制」の脱却といふ目標に向つて小澤氏はこの二十年間、一直線に歩いてきた」と褒め上げる(「諸君!」平成二十年十二月號)。そして政権交代が實現した際には、「日本沈没といふ國民の危機感が不安に満ちた民主黨にでも政権を託してみよう」と判断させたのだから、さうした「大衆は賢明だつたといふべきだ」とまで書いた(「WILL」平成二十一年十二月號)。

北潮
 百年前の十月十日、湖北省武昌で辛亥革命が起つた。中国近代化の出発点となつた事件で、翌年一月一日、中華民國臨時政府が樹立された。その中心にいたのがいふまでもなく孫文である。さういふことであつて、最近、孫文関連の本が色々出てゐるが、この九月、岩波文庫に『孫文革命文集』が入つた。中国が毛沢東時代に戻ることが先ずあり得ない。それは、國民を再び恐怖と貧困に陥れるからであらう。しかし今の中国には向かうべき目標・理念がない。さうした理由からであらうか、このころ中国でも孫文の見直しが行われてゐる。周知のように、孫文は三民主義を唱へたが、その目指すところは社会民主主義に近かつた。従つてそれは、マルクス主義に立つ毛沢東思想とは基本的に相容れない。だが、孫文の思想と毛沢東思想には重なるところもある。二点ほど挙げて、一つは、毛沢東が「一党支配を説いたのは当然であるけれども、孫文も訓政期という一定期間は一党支配を認めていた」といふことは、『孫文革命文集』の解説にもあるやうに、孫文も毛沢東と同じく個人の自由を否定してゐたといふことである。だから、中国共産黨が孫文を利用することもあるが、しかしそれは台湾に屈服することだ。やがて中国に残されてゐるのは、人民解放軍による、孫文の言葉を使えば、軍政ではないだらうか。

中国を拒否できない日本 関岡英之著
 日本は中国に呑み込まれるのか? 中国の新国家戦略を徹底検証
 大きな脅威となつた中国の経済力と軍事力。そこにはどのような国家戦略が秘められているのか。「超限戦」に対して「汎アジア」構想を提唱する新たな地政学の試み。
 定価819円(税込) ちくま新書 331-8507 埼玉県さいたま市北区榎引町2-604
 サービスセンター TEL:0120-29-9625 FAX:048-666-4648